

「授業の構成」を考える

「授業の構成」と授業研究での資料の利用

教師は、学習内容と指導目標に対し、時間内に確かな学力のつく学習指導計画を立てる必要があります。

そのためには、“導入”“展開”“まとめ”といった各分節の役割や、発問、確認、問題、話し合いといった言語活動の特性を基礎資料から知り、児童に指導することが求められます。

授業実践の後には指導計画、指導方法、評価などが適切であったかを振り返り、次の実践へ活かすためにはどのようにすればよいかを考えます。

1 授業の構成 ～45分の指導案をどのように構成しますか？～

授業は、導入、展開、まとめと大きく3つに分けることができます。それを小目標（分節）ごとにさらに細かく分けるとすると、45分間の授業は全部でいくつの分節で構成されるでしょうか。

多くの授業は、3～6分節で成り立っています（図1、図2）。

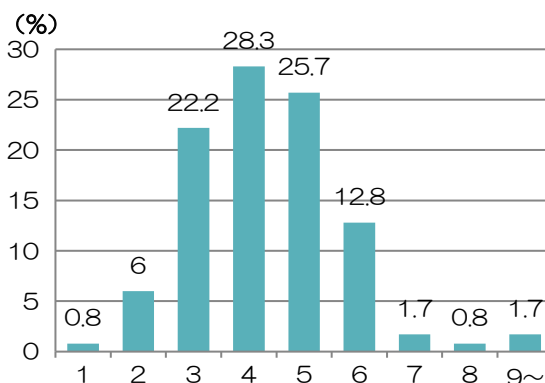
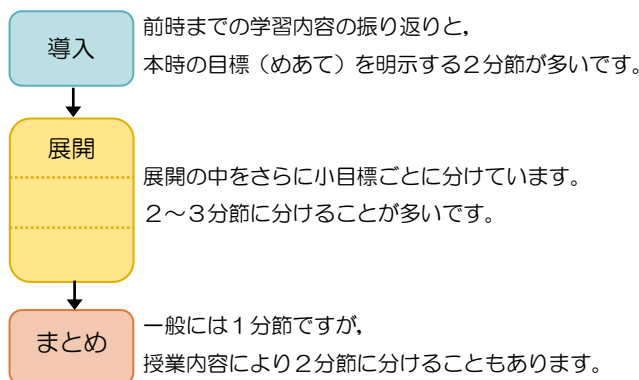


図1 授業の構成

図2 小学校・1時限の分節数

2 導入、展開、まとめに要する時間の参考資料

表1、2は、導入、展開、まとめに要する時間について、数百の授業をビデオで撮影・記録し、整理した資料です。授業を計画するまたは振り返るときの1つの参考として利用して下さい。

（この数値はあくまでも参考資料です。数値が独り歩きをしないように注意して下さい。）

表1 各分節の所要時間

	Q ₁	Q ₂	Q ₃
導入 (本時の課題設定)	7分 (4分)	10分 (6分)	13分 (8分)
展開	数分	～	十数分
まとめ	4分	6分	8分

* Q₁は全体の1/4、Q₂は全体の1/2、Q₃は、体の3/4を表します。

表2 各分節の通過率（小目標を理解した児童の割合）

	Q ₁	Q ₂	Q ₃
分節の通過率	65%	85%	95%

*収集した授業のうち1/2の授業は、小目標を85%の児童が理解して授業が進められていました。1/4の授業においては、児童の65%しか理解していませんでした。

各分節で小目標が達成されているか確かめながら、次の分節に進みましょう。

※今回の教育実践資料は、下記の授業分析データを整理し、教育実践への活用を検討した資料です。

本誌の資料（数値データ等）は、文部省科学研究費特定研究「科学教育」広瀬班報告書“TM 計測による理科教育の研究”No.7（1971.3）によるものです。

3 導入、展開、まとめと分節の時間

授業を小目標で区切らず「だらだら」と展開しては、児童に確かな学力がつきません。

「節目、節目で児童に何を身に付けさせたいのかを明確に！」

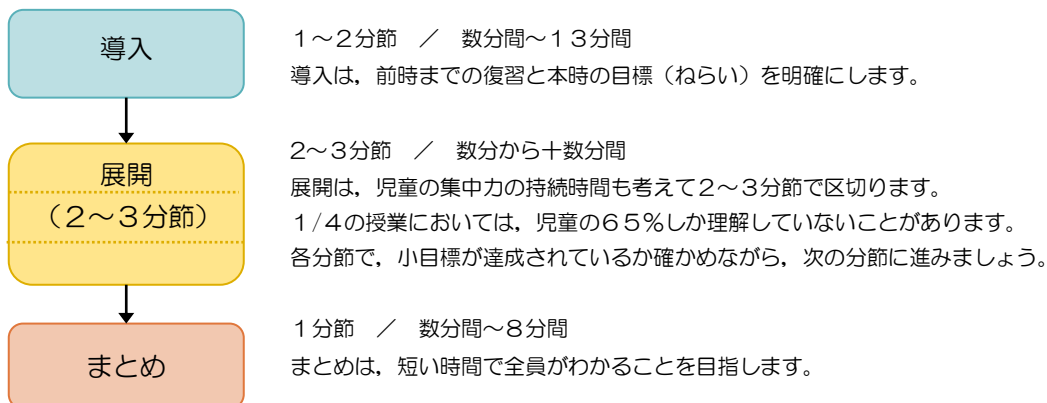


図3 授業の分節ごとの時間と通過率（小目標を理解した児童の割合）

目標を達成するために、導入、展開、まとめの各分節で、教師の発問、確認、問題、話し合い（グループ討論、全体討論）などのそれぞれの特性を持った活動が行われています。

4 トピック まとめ教師・児童の話し合い

「まとめ」では多くの場合、教師と児童で話し合いを繰り返し、最後は全員がわかるように指導されています。次の図4は、多くの授業について全体討論の場面で調べた、教師と学習者の発言傾向です。

理解度	0.0	0.5	1.0
0 ~ 25%	教師		学習者
25 ~ 50%	学習者+		
50 ~ 75%	教師	学習者-	学習者+
75 ~ 100%	教師	学習者+	

学習者の+, -は、発言内容により (+) (-) と区別

図4 「まとめ」の教師と学習者の活動

【図4解説：理解度と発言傾向から】

- 0～25%では、主に教師が本時のねらいや学習方法の説明をしています。
- 25～50%では、主にわかっている学習者(学習者+)が中心となって話し合いを進めています。
- 50～75%では、わからない学習者(学習者-)が疑問を投げかける、もしくはそれまで討論されてきたことと違った方向からの考え方が出され、理解度が上下するが、結果的に全体の理解度は上がります。
- 75～100%では、約8割が学習者の発言だが少ない発言で教師がしっかりまとめています。

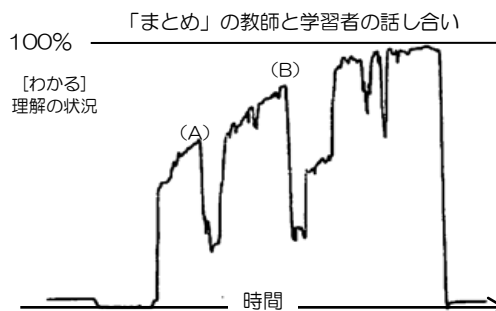


図5 授業のまとめ（新卒2年目の若田晃先生の授業より）
（後藤忠彦「計測用T.M.による集団反応曲線の分析」
TM研究5報（24-36）1969年より
なお、時間軸の流れがわかりやすいように、論文掲載時の図を反転させた）

【図5解説】

図5の(A)(B)は、学習者が疑問を投げかける、もしくは別の見方の発言により理解度が下がり、他の学習者の発言で再度上がっています。最後に理解度が上下している理由は、教師が深みを入れる発言によるものです。理解度が下がった時、次の指名した学習者の発言で上がることが重要です。下がり続けられないような見通しが大切です。（鉄は熱いうちに打て）。

このような話し合いをさせるためには、教師は学習内容についての知識をもち、児童たちの学びの状態・構造に合わせた学習指導の方法を理解しておく必要があります。また、これらを総合的、直感的に判断し、とるべき行動を即座に実践できる力が必要です。

教師・児童の学習活動について

1 発問について…「発問と応答」を考える 参照

教師の発問の後、最初の児童が反応する時間 (τ_0) はおおよそ 10 秒～20 秒です。

表 3 教師の発問に対して最初の児童・生徒が反応する時間 (τ_0)

	Q ₁	～	Q ₃
小学校	10 秒	～	20 秒
高等学校	10 秒	～	23 秒

*小学校と高等学校でも、最初に反応する時間は、あまり変わりません。

「わかった」と反応した最初の 1 名は、本当にわかっているのか疑問に思う児童がいます。本当にわかって応答しているか、判断して下さい。



2 確認的発問

確認（確認的発問）とは「朝ごはんを食べてきましたか」、「見たことがありますか」など、簡単な発問をし、児童が「考える」、「課題を解決」する必要がない正誤の確認です。

表 4 確認的発問に対して最初に児童が反応する時間 (τ_0)

	Q ₁	～	Q ₃
確認的発問	4 秒	～	14 秒

*最初の児童が反応する時間は、1/2 が 4 秒～14 秒の間です。これよりは早い反応、遅い反応する場合は、全体の回数の 1/4 くらいあります。しかし、実際には応答が遅い児童もいて、確認の内容次第でも遅れて反応します。

3 問題

小学校の問題（練習）は、教師がヒント、説明をする場合が多いです。

表 5 問題に対して全員の児童が反応する時間 (T)

	Q ₁	～	Q ₃
問題	2.6 分	～	5.4 分

*問題に対して全員の児童が反応する時間は、1/2 が 2 分～5 分です。問題にかかる時間は、児童が反応するまでに 8 分以上かかる場合は、1 割です。

このように、すぐにわかる児童とそうでない児童には、時間差があります。これを踏まえた上でそれぞれにあった指導方法を考えましょう。

数値の利用上の注意 (数値が絶対的なものと考えないで下さい。)

本報告には、各種の数値が表示されています。授業の計画分析にあたっては、参考数値として取り扱ってください。

学習内容・指導方法・学習状態から考えて、自分のデータを参考数値と比較し、違いの理由を考えて指導の役に立てて下さい。

4 話し合い

グループ討論と全体討論について

小学校のグループ討論は、重要な学習活動です。グループ討論から全体討論への展開は、よくある進め方です。課題解決の状況は、グループ討論と全体討論とで差がなく、注目すべきです。

□課題解決状況は次の通り

	Q ₁	Q ₂	Q ₃
グループ討論	50%	69%	87%
全体討論	53%	73%	87%

注目

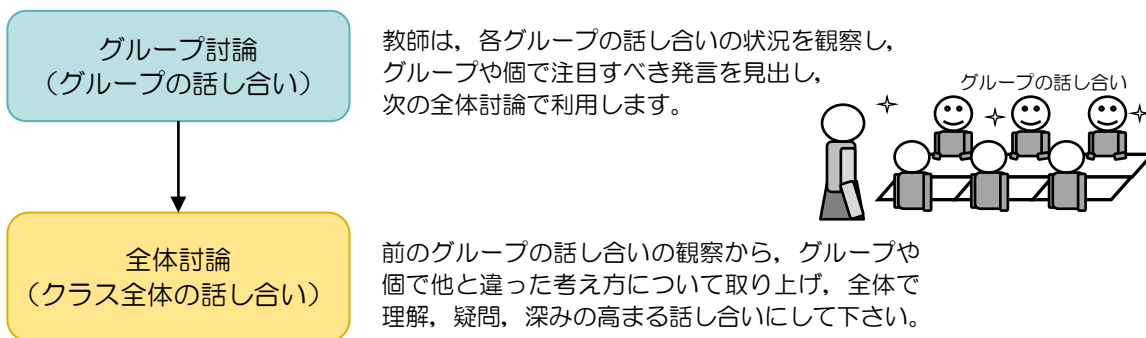
クラス全体の話し合いで、さらに理解度を高めるように！

□所要時間（話し合いをした時間）は次の通り

	Q ₁	Q ₂	Q ₃
グループ討論	2.2分	3.0分	4.0分
全体討論	1.2分	1.6分	2.4分

* 困難な課題については、さらに長い時間になります。

グループ討論と全体討論の場における教師の役割を次の図で整理しました。



5 トピック 授業中の教師と児童の発言の数

～授業中に教師が話しすぎてはいませんか？～

初任者は発言が多いといわれます。そこで、自分の授業の発言状況について次のように調べてみましょう。

□全体の発言数の集計表

発言者	発言回数
教師の発言の回数	回
児童の発言の回数	回

□領域別での教師と児童の全発言回数の内訳

領域	発言者	発言回数	発言回数 / 全発言回数
① 教師が主に活動	教師	回	%
	児童	回	%
② 児童が主に活動	教師	回	%
	児童	回	%
③ 評価	教師	回	%
	児童	回	%

自分で調べるときは、ICレコーダやビデオカメラで撮影して調べてみましょう。授業研究では、参加者が発言の状況などについてメモをして下さい。